（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	KWAK MINSEOK
論文題目	自己否定する主体―１９３０年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、１９３０年代の「帝国日本の思想」を考察の対象とし、その中で「日本」と「朝鮮」という観念が、「自己否定する主体」という概念によって媒介されている様相を明らかにしたものである。

序論では、本論文の分析方法を定めるために、「自己否定する主体」という新たな「主体」の理論を提起した。

第Ⅰ部第１章では、日本の哲学者田辺元と朝鮮の哲学者朴鍾鴻の哲学を比較考察することによって、帝国日本―植民地朝鮮の哲学界に存在した「否定」の磁場を分析した。まず、「ハイデガー批判」というトポスによって接近する田辺と朴鍾鴻の哲学的試みを検討した。続いて、社会的存在論の構築に進んだ田辺と朴鍾鴻の哲学が、種的基体としての民族を重視する点で共鳴する反面、「超越的対象」を容認できるかの問題で両者が分岐していく様相を明らかにした。

第Ⅰ部第２章では、田辺元の「種の論理」を取り上げ、彼の社会的存在論についてより詳細に分析した。まず、田辺の「種」概念が基体としての意味から、「自己疎外態」の意味にまで変化していく軌跡をたどった。続いて、田辺の「種の論理」に対する近代主義的な理解やポストコロニアリズムからの解釈を、批判的に検討した。そのことにより、帝国日本における民族的な分裂像を認識しようと試みた哲学として「種の論理」を再解釈した。

第Ⅰ部第３章では、朴鍾鴻の「ウリ（＝我々）」の哲学の生成過程を分析した。まず、朴鍾鴻が三木清の哲学から受けた影響を検討し、彼が三木哲学の普遍的な図式を克服するために「階級」と「民族」を同一視する論理を構築していく過程を描いた。続いて、三木哲学を彼なりに克服することで、朴鍾鴻が「自己否定」によって可能になる民族像を打ち立てていく経緯を明らかにした。

第Ⅱ部第１章では、１９３０年代の帝国日本―植民地朝鮮で流行した「不安」をめぐる諸言説を分析の対象にし、帝国の思想家や植民地の思想家が不確かな現実をどのように捉え直そうとしたのかについて論じた。まず、三木による「不安」理解を検討し、小林秀雄と戸坂潤が各々どのように「不安」言説にかかわっていたのかを分析した。そこで、小林は現実そのものが持つパラドクシカルな性格を主張するのに対して、戸坂は現実におけるパラドクスを理論的に認識しようとするという、両者の相違を指摘した。続いて視野を植民地朝鮮にまで広げ、三木の危機理論を媒介にした「不安」言説の伝播様相について分析した。最後に、植民地朝鮮の哲学者たちが「闘争」や「対立」を本質的な内容とする現実の概念について哲学的に思考しようとしたことを明らかにした。

第Ⅱ部第２章では、保田與重郎の批評を俎上に載せ、イデオロギー的な批判に晒されてきた保田の思想を内在的な視点から読解することを試みた。まず、保田が批評家としての立場を確立する過程で朝鮮を訪ねていたことを重要視し、そこで「人工」と「自然」の「イロニー」としての「廃墟」を発見したことについて分析した。また、保田が後鳥羽院の文芸から導き出した日本文芸における「血統」の観念も、以上で分析した「イロニー」の観念の延長線上で理解できることを明らかにした。

第Ⅱ部第３章では、植民地朝鮮の批評家崔載瑞の作品を取り上げ、分析を行った。崔載瑞の初期批評における「秩序の文学観」が「個性滅却」の思想に支えられていたことを指摘し、彼の批評における内在的な動機を解明した。また、そのような「個性滅却」の思想が彼の主知主義的な批評理論に一貫して流れていることを論証し、「皇道文学」にまで至る彼の批評を一貫した内在的な動機から分析した。

第Ⅲ部第１章では、帝国日本と植民地朝鮮におけるモダニズムを代表する小説家、横光利一と李箱の文学を比較考察した。まず、横光が自らの朝鮮滞在の経験に基づいて作品化したいくつかの小説を取り上げ、そこで「泥棒と乞食」として形象化された「朝鮮人」のイメージを検討した。また横光が描いた「朝鮮人」のイメージに自らを同一視することで得られた「言語を蕩尽した浮浪者」としての李箱の自己意識について論じた。続いて横光の「朝鮮」認識に対する李箱の対決意識に焦点を当て、「失敗」によって逆説的に果たされたその対決の様相を明らかにした。

第Ⅲ部第２章では、川端康成の文学を取り上げ、分析を行った。まず、１９２０年代まで「救ひ」としての「死」の観念にこだわっていた川端が、１９３０年代に入ってから、「死」と「生」を観念的に区分しない姿勢から物事を捉える「「死」の存在論」とも呼び得る立場を確立していく過程を明らかにした。特にその過程における川端の「朝鮮」体験に焦点を当て、その体験から得た「うつろな寂しさ」としての「朝鮮」のイメージについて論じた。さらに、「うつろな寂しさ」の感覚から「「死」への語りかけ」や「死顔に化粧」のイメージを経て、生死一如の新しい感覚を捉えようとした川端文学の一面を明らかにした。

第Ⅲ部第３章では李箱の文学を取り上げ、彼の思想において「東京」が何を意味していたのかを分析した。まず、「近代」「脱近代」「植民地近代」の概念によって解釈されてきた李箱に関する既存の研究を批判的に検討し、「十九世紀」と「二〇世紀」といった李箱自らの用語を用いて、「秘密」という李箱モダニズムの核心的な概念を導き出した。次に、彼のいう「秘密」の観念が絶対的な価値への志向と密接に結びついていることを指摘した。そして、李箱にとっての「東京」が、すべての価値の抹消が可能かどうかを試みる実験場としての意味を持っていたことを明らかにした。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、１９３０年代の日本と朝鮮の哲学・思想・文学に関して、その越境的かつ媒介的な関係性に着目することにより、日朝・日韓を二項対立的にとらえる従来の方法とはまったく異なる視座から分析したものである。

まず重要なのは、この時期の日本と朝鮮の哲学的越境関係に関しては、日本ではほとんど先行研究がなく、韓国でも近年ようやく研究が始まったという点である。本論文で大きく取り上げられる京都学派の田辺元については、解放後の韓国では忘却され、ほとんど知られていない。したがって、田辺を中心とした京都学派が朝鮮の哲学といかなる関係にあったのかも、まだほとんど解明されていない。この点を正面から取り上げたことだけでも、本論文の学術的な価値は非常に高い。

申請者は「自己否定する主体」という独自の概念によって、この時期の日朝の多様な哲学者・思想家・文学者を分析する。この概念は、申請者によれば、従来のポストコロニアリズムの持つ弱点を克服するためのものである。ポストコロニアリズムが支配者と被支配者との権力関係を精細につかみとるための方法論であるとするなら、申請者の「自己否定する主体」とは、あらゆるアクターが同時的に媒介しあう関係性のなかで、西洋世界も含めた知的フィールドにおける主体の確立を、自己否定という働きによって繰り返していく運動性である。

申請者はこのような考えのもと、田辺元、朴鍾鴻、三木清、小林秀雄、戸坂潤、保田與重郎、崔載瑞、横光利一、李箱、川端康成など日朝の「自己否定する主体」たちを横断的・通底的にとらえなおした。人文学の多分野にわたる対象をこのような枠組みで再解釈したことは、申請者の学際的な高い能力を示すものである。

まず重要なのは、田辺元と朴鍾鴻が同時期にハイデガー批判という共通の地平を持ちながら自らの哲学を構築し、さらに種としての民族を重視するという通底性を指摘したことである。これは、従来、宗主国と植民地という非対称的な二分法で語られてきた日本と朝鮮の関係を、すくなくとも哲学のフィールドにおいては共時的な媒介性としてとらえうることを明らかにしたものであり、高く評価できる。しかしこのことは、日本と朝鮮が対等の立場にあったと主張するものではない。帝国という磁場のなかで、同じ問題群を抱えながら異なる哲学を構築せざるをえない関係性を、たとえば超越性をめぐる田辺の肯定的な態度と朴鍾鴻の否定的な態度の分岐というように、きめ細かく析出していくのである。この意味で本論文は、きわめて繊細な分析態度を堅持しているのであって、今後の東アジア思想史の議論に大きく影響を与えるものと認められ、先駆的だと評価できる。

京都学派と朝鮮の関係はさらに、朴鍾鴻が三木清をいかに受容し、それを克服していくかを分析した章に引き継がれる。ここで朴鍾鴻は、民族という概念を打ち立てる

際にやはり自己否定という運動をとりいれるが、これもまた三木を媒介とした思考の同時性によって可能だった。このように本論文は、これまで語られることがなかった近代日朝の哲学の越境性と相互性を果敢に明るみに出している。

申請者の分析の繊細さは、論文の後半部分、つまりさまざまな思想家や小説家たちを扱う章においても発揮される。これまで朝鮮との関係が語られてきた保田や横光や川端に関しても、日本と朝鮮の非対称性よりも媒介性に焦点を当て、彼らがいかに自己否定する主体であったのかに関して、朝鮮とのかかわりの意味を解読した。また逆に朝鮮の小説家・詩人であった李箱に関しては、これまで数多くなされてきたポストコロニアリズム的分析によってはその文学の意味を解明することはできないとし、すくなくとも李箱の意識においては日本と朝鮮（あるいは京城と東京）は共通の問題群、つまり「秘密」を媒介しあうモダニズムの場所であったと主張する。

このような方法論によって申請者は、帝国という場における知の生成の分析において、主体が一国知的なアリーナにおいて構築されるのではなく、また宗主国のアクターと植民地のアクターが権力的な関係性のみを持って継時的に生み出されるのでもなく、相互の自己否定という運動によって形成されていくことを明らかにした。今後の植民地研究にひとつの有効な方向性を提示したものと評価できる。

本論文では哲学・思想・文学という広範囲のテーマが扱われたが、そのなかでも特に京都学派と朝鮮の関係をさらに深く掘り下げて、そこから析出されるあたらしい哲学的関係性、媒介性を詳述することも今後の課題となるだろう。

そのことも含めて、今後、「自己否定する主体」という概念の汎用性を高めてあたらしい方法論として鍛え上げていくことが、強く期待される。

以上から、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和５年１月２５日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降